中部学院大学・中部学院大学短期大学部　教育実践研究第３巻第２号（2018）207－211

招待論文

本論文は2017年３月11日に中部学院大学各務原キャンパスで開催された、「岐阜済美学院創立100周年記念事業　中部学院大学　教育フォーラム 2017」での報告内容を掲載したものである。

国語科における不易と流行
― 教科の本質について ―

加　藤　大　志[1)]

Immutability and Fluidity in Japanese as a School Subject
― About the Nature of the Subject ―

Taishi KATO

１　はじめに

学習指導要領において、言語活動の充実が言われて久しい。同時に国語科は、「言語の教育としての立場を一層重視」することが求められている。他教科でも位置付く言語活動を、言語の教育を担う国語科が、どうとらえていくのか、これは、他教科から国語科の指導の根幹を問われていることと同義だと考える。

このことは、今後、学習指導要領が改訂されても変わるものではない。国語科教師は、国語科における不易の部分として、じっくりと向き合い、流行を取り入れた自分なりの指導法を確立すべきと考える。

２　国語科の本質について

＜不易流行＞

「不易流行」とは、元禄時代の俳聖、松尾芭蕉が確立した蕉風俳諧の真髄を端的に表した言葉である。「不易」とは、時代の新古に左右されず不変なるもの、「流行」とは、その時々に応じ変化してゆくもの、ということであるが、国語科における「不易」とは、「実生活で生きて働き、各教科等の学習の基本となる国語の能力を身に付けること」また、「我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度を育てること」だと考える。例えば、以下のような力を児童生徒に身に付けさせることであり、日本語を大切にし、古典文学に興味関心をもって、継承発展させていく態度の育成、だと考える。

①聞き手を意識して、伝えたい内容を相手に的確に伝える力
②決められたテーマについて、決められた時間内に、決められた字数を書く力
③書かれている言葉に準拠しながら、書かれていないことを読み取る力
④正しい鉛筆の持ち方で、背筋を伸ばし丁寧な字を書く力

国語科における「流行」は、「カリキュラム・マネジメント、アクティブ・ラーニング」を意識した学習内容を構築し、指導項目を明確にした言語活動の位置付けなのではないか。

「流行」は不易を目的とした時の方途なのだと考える。

現在、情報機器の進化は日進月歩であり、各種ICT デバイスが開発されている。例えば、「メガホン型翻訳機」なるデバイスもあるが、これは単なるメガホンではなく、４ヶ国語に対応しており、「道

1）各務原市教育委員会学校教育課　課長補佐

をあけてください」、と言えば、その後ボタンを押すと、自動的に「プリーズ　クリア　ザ　ウェイ」との音声が発せられる。このようなデバイスが登場すると、極論ではあるが、外国語は学ばなくても、翻訳デバイスを活用することで、外国人とのコミュニケーションが成立してしまうのではないかと、錯覚する。同時にデバイスの発達が、教科の学習内容を変化させていく可能性も皆無ではない。実際に国語科においても、漢字の指導内容が変化した。

平成元年には、その学年までに学習した漢字は、まずは読め、その大体は書けることが目標であった。10年後の、平成10年では、その学年までに学習した漢字は、読めることができ、書く方は、前の学年までの漢字は書けるとともに、その学年の漢字は順に書けるようにすること、と書くことに若干幅が出てきた。更にその10年後、平成20年には、まずはその学年までに学習した漢字は、読むことができ、書く方は、前の学年までの漢字は書けるとともに、その学年の漢字は順に書き、文や文章の中で使うことと、実際に使うことが目標に入ってきた。

これは、パソコンやメール等、書くというより、キーボードを打つことが多くなり、そのことで、漢字は変換すれば済んでしまうので、書くことよりも、読むことを優先するという、コミュニケーションツールの発展による変化だと考える。

しかし、そのような社会情勢、時代の流れに影響されない、国語科の本質は、不易の部分にあると考える。

＜言語活動・他教科との相違＞

言語活動の充実が言われて久しいが、言語活動のとらえも、国語科と他教科は異なる。国語科は、言語活動を通して、言語能力を鍛えるわけであるが、他教科は、言語活動を通して、その教科の本質に根ざした見方考え方を鍛える（図１）。

例えば、著名な作者の絵画を鑑賞して、その絵の良さを交流するという言語活動を位置付けたとする。美術科では、その絵画のもつ、魅力を見抜くことができているか、造詣要素に着目できているか、が重要になる。すなわち、その言語活動の中で、つたない話し方であっても、その着眼点があれば、美術科としては評価できるわけであるが、国語科は、つたない話し方だとそれは指導対象になる。その造詣要素の良さや魅力を、的確に言葉で表現できているか、自分の解釈を、他者に説得力をもって説明できているか、が国語科にとっては、重要だからである（図２）。

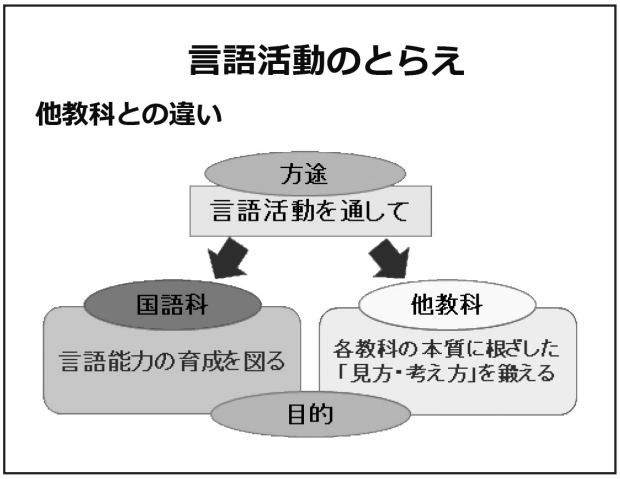

図１　言語活動における国語科と他教科との相違

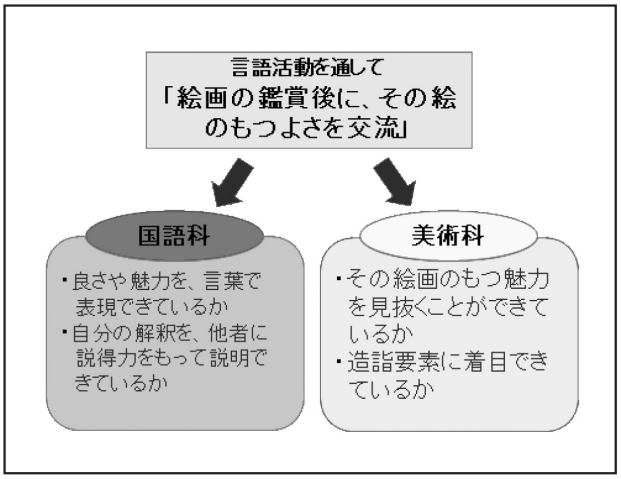

図２　言語活動における国語科と美術科との相違

＜学習課題・他教科との相違＞

課題解決型学習が定着している中、学習課題についても、他教科との相違は明らかになってきている。一単位時間における学習課題の定型で、他教科においては、多くの場合、「何故○○は、□□なのか」「どうして、△△は●●なのだろうか」という形の、「Ｗｈｙ」型で提示される。対して国語科は、「第３場面の主人公の心情を読み取ろう」「○○場面の□□の気持ちを音読で表現しよう」という形の「Let's」型を提示する。

これは、国語科の授業の性質からくるものであり、他教科から見た時、「国語科が提示する課題は学習課題として機能していない」との指摘を生むことになる。しかし、これは、まずは何かしらの言語活動を始めないと、国語の授業が始まらないという、授業スタイルに根ざしているものである。

この点は特に留意すべきことである。国語科が、授業の最初に提示する文言は、他教科のいう、学習課題ではなく、活動目標であるということを大前提として捉える。国語科は、児童生徒に活動の見通しを持たるための目標を提示していると考えれば、当然、その授業の終末で、他教科のように、学習課題の克服ができたかどうかの評価を、最初に提示した学習課題の文言に照らし合わせることはできない。もしそれを行えば、それは単に活動目標に対して、活動できたかどうかを評価しているだけになるからである。

今年度、ある中学校の国語の授業を見る機会があったが、板書の最初には、赤で囲まれて「情報の発信者となるために、大切にすべきことは何か考えよう。」とレッツ型の文言が学習課題として提示してあった。しかし、大切にすべきことは何かを読み取り、意見交流をしていく中で、本文の内容に係って「想いのリレーに加わるために大切にすべきことは何か？」との疑問が出てきた。そして、それを学習課題との言葉こそ使われなかったが、黒板に位置付け、赤で囲み、Ｗｈｙとして、皆で考え始めた。この流れこそが国語科の授業に大切だと考える。すなわち、活動目標にそって、言語活動を行い、その中で生まれた疑問を学習課題として位置付け、新たに、その学習課題を克服する言語活動を行い、終末には、学習のねらいを達成したかどうかの評価を行うということである（図３）。

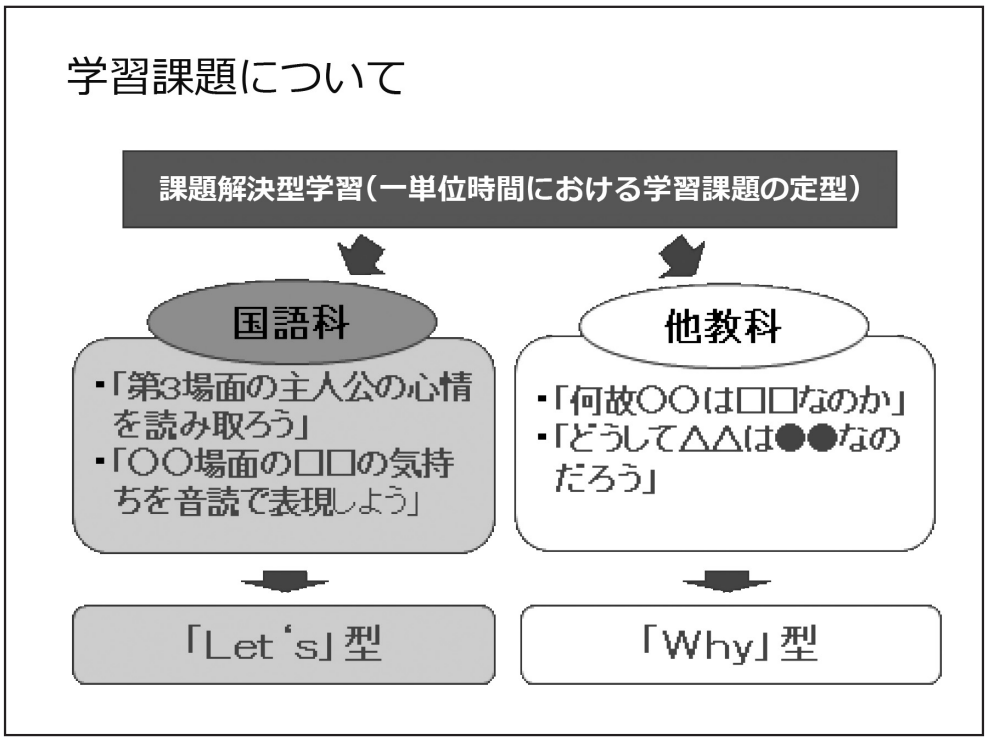

図３　学習課題における国語科と他教科との相違

＜学習活動・道徳との相違＞

国語科の読解力を高める、「読み取り」の授業と道徳の学習活動は、その形態だけを見れば、非常に似ている。だからこそ、テキストを読んで、主人公の心情を話し合うという活動で考えた時、国語科は、国語の授業と、道徳の授業の本質の違いをはっきりと認識しなければいけないと考える。国語科において、どれだけ主人公の心情に寄り添った道徳的価値の高い読み方をしても、それが表現に根拠を置いたものでない限り、読み取ったこととはいえないのである。その発言は、感じたこと、考えたことであり、読解力の観点から言えば、それは国語の授業として

言語能力育成の評価の対象とは言いがたいのでなかろうか。児童生徒の発言に対して、教師が「すばらしい読み取りでした」と価値付ける場面を見るが、それは国語の言語の能力を価値付けたことにはならない。あくまでも、表現に根拠を置いた上で、その表現の奥に隠された、若しくは直接言葉で表現されていない心情・事柄が読み取れたかどうかが、国語科では重要なのであると考える。言語能力を身に付けさせること、これが国語の根幹である。

しかし、「国語科は言語能力を高めるためだけの教科である」いうことではない。下記の図４で説明する。

この図の縦軸は、言語能力の高さ低さを表す。横軸は、心の耕し度である。心の耕し度を「心が冷たい」「温かい」と表現している点については、また別の見方も出てくるのであろうが、この横軸と縦軸を交差させると、４つのゾーンに区切ることができる。

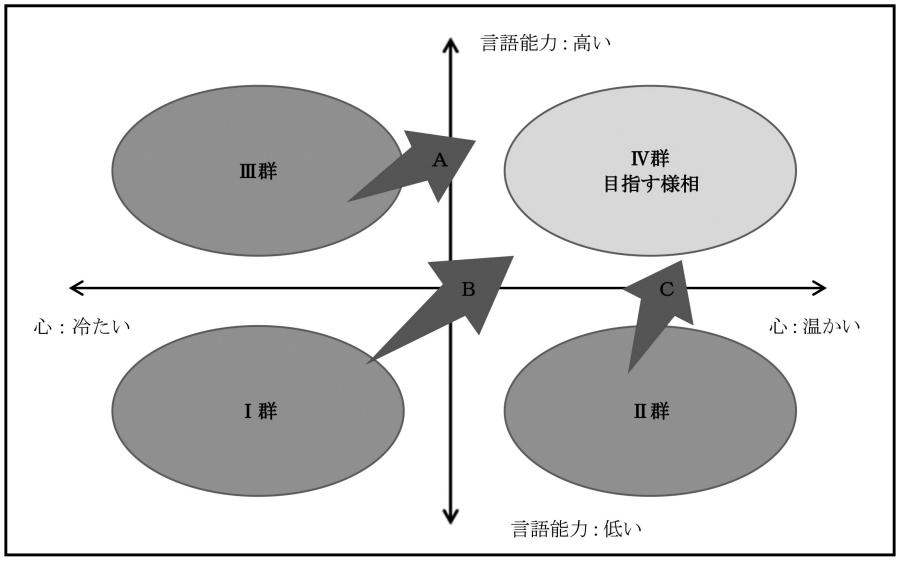

図４　学習課題における国語科と道徳との相違

Ⅰ群は、言語能力が低く、心が育っていない様相を表す。Ⅱ群は、心は育っているが、言語能力は低い、Ⅲ群は、言語能力は高いが、心が育っていない、Ⅳ群は、心も育っており、言語能力が高い。

国語科教師が目指すべき子どもの様相は、言うまでもなくⅣ群である。したがって、ⅠⅡⅢ群をどうⅣ群に導くかが国語科の指導になる。

矢印Ａは、道徳科を中心とした心の耕し、であるし、国語科でも当然その責は担う。矢印Ｃ、は国語科がその責任をもって担うべき指導、すなわち言語能力の育成である。矢印Ｂは、ＡとＣの両方となる。

読解力を高める授業の中で、テキストを読み、自身の読み取りを交流するという言語活動を行う場合、目の前の児童生徒の実態を把握し、どの矢印での指導がその児童生徒に適しているのか考えなければ、児童生徒一人一人のニーズにそった的確な指導は難しいのではないであろうか。

このことは、とても大切だと考える。言語能力ばかり身に付けさせることに特化すると、Ⅲ群育成をしてしまう。Ⅲ群にいる人間が付く職業は、詐欺師ではなかろうか。言葉巧みに人を騙す。言語能力が高くなければできることではない。

例えば、時として、戦争教材を扱った授業で、元気いっぱいの教室を見ることがある。今は戦争教材とは言わないが、「ちいちゃんは、なぜ空に上がっていったのでしょうか？」とにこやかに、笑顔で問う教師。それに応え、多くの子ども達が「はいはいはい」と元気に手を上げ、指名された児童が、得意げな笑顔で、「死んだからです」と答える。確かに読解力は付いている。だが、その教室の行く末を考えると、案じてやまないものがある。

戦争教材は常に重い雰囲気で口数少なに授業をせねばいけないとは、全く思わないが、しかし、せめて人の死に触れる場面では、しっとりと、じっくりと子ども達の心を揺さぶる必要があるのではなかろうか。

＜言語能力＞

言語能力を身に付けさせると一口に言うが、国語科は、コミュニケーション能力とは違うということを認識した上で、指導に当たる必要がある。大別すれば、言語能力は、コミュニケーション能力の土台と言える。例えば、英語科で考えれば、コミュニケーション能力の育成は重要である。自分の持つ、英単語の限られた語彙の中で、相手とコミュニケーションを図ることも、重要なコミュニケーションスキルである。しかし、国語科は、その前提が母語を使った意思疎通であるため、限られた語彙の中でのコミュニケーションではなく、少しでも多くの語彙を増やし、適切な意思疎通を行えるよう、言語能力を鍛える必要がある。

最近、ソーシャルスキルと言う言葉も多く聞くが、言語能力、コミュニケーション能力と、ソーシャルスキルはまた別物であると考える。生きて働く力の一端が、ソーシャルスキルであるのならば、そのスキルの土台は、やはり言語能力である。

3　終わりに

国語科の指導で、大切したいことの一つに、「児童生徒に自分が用いる言葉に対するメタ認知の意識をもたせる」ことがある。

自分の言語活動を客観視し、より高い言語能力を身に付けられるよう訓練する意識をもつこと、もたせること。30代、私は先輩からの教えで、授業をテープで録音し、聞きながら文字に起こすことを何度も繰り返した。当時はその作業が辛かったのではあるが、このことは、自分の指導力を磨く上でとても効果があったと考える。

自分の話し、音声言語を俯瞰して評価する概念ができると、その次として、自分の話を相手がどう捉えているのか、反応も俯瞰してつかむ意識が芽生える。同時に、相手の反応に合わせ、自分の話し方、話す内容を精査し、その場に応じた話し方に調整することができると考える。

義務教育９ヵ年の最後に「旦那様」と言った時のルントウの心情を読み取る授業（不易）は絶対に必要である。しかし、それ以上に重要なことは、その時間にたどり着くまでに、どれだけ言語能力が鍛錬されているかということである。だからこそ、小学校１年生の時から、言語能力の育成を明確に打ち出した授業を位置付け、螺旋的に指導していく。そのためには、現行の学習指導要領でいえば、解説書の付録４「各学年の目標及び内容の系統表」を絶えず見つめ、一単位時間ごとに、また目の前の子どもたちの言語能力に応じ、指導事項を明確にした授業を構築せねばいけないのではないであろうか。付ける言語能力一覧表や、その系統表が、国語科におけるマトリクスであり、このマトリクスを持たずして、今後の国語科の教育課程は編成できないと考える。